

◆ 続・頂点 ◆

前回は、淀川で生態系の「頂点」に位置する猛禽類として『ミサゴ』を紹介しました。『ミサゴ』は主に『コイ科』や『ボラ』などの大型の魚類をエサとするため「魚鷹（うおたか）」の異名があります。

今回紹介する『チョウゲンボウ』も『ミサゴ』と同じく生態系の「頂点」に位置する猛禽類ですが、魚類ではなくネズミやモグラ、トカゲ等の小動物や小型鳥類、昆虫類などをエサにします。猛禽類の中では小型で、体長はオスで33cm、メスは38cm程度で、オスでほぼキジバト並みの大きさです。

かつては断崖の横穴や岩棚、樹洞に営巣していましたが、近年では都市部のビルや橋桁、高架道路などの人工物に営巣をしたり、ねぐらとする事が増えてきたようです。淀川中・下流域の河川敷や河川公園は、『チョウゲンボウ』の格好の狩りの場所となっています。堤防の脇に林立するマンションやビルにとまって“狩場”を眺めながら、獲物を見つけると一気に飛び出して急滑降しながら獲物を捕らえます。その場が安全であれば、捕らえた場所で餌を食べることもあります。

淀川の土手や河川敷を歩く機会があれば、堤防沿いのビルや、河川敷に生えている樹木等を見て観察してみてください。もしかすると羽を休める『チョウゲンボウ』に出逢えるかもしれません。さらに運が良ければ、カップルでいる事もあります。その他『ハイタカ』や『ハヤブサ』などの猛禽類にも...

一般的に『トビ』を除いて、猛禽類にはなかなかお目に掛かれないというイメージがありますが、都会の中に広大な草地や河畔林などの環境を有する淀川には、上手に人間の産物を利用して猛禽類が棲息しています。



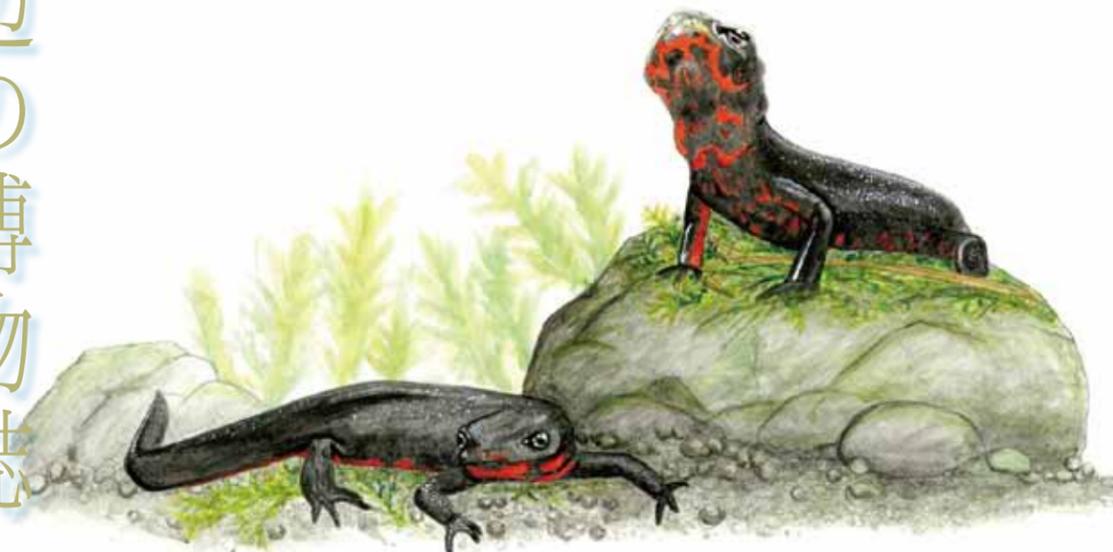
チョウゲンボウ
Falco tinnunculus



環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works

池田 哲哉

水辺の博物誌



フグ毒をもつ井の守り主

アカハライモリ *Cynops pyrrhogaster*

ニホンイモリの別名がある日本固有種のアカハライモリは、サンショウウオに似ていますが皮膚がザラザラしていること、鮮やかな赤色と黒い斑紋の腹部で容易に見分けることができます。この派手な色は毒を有することを知らせる警戒色。フグ毒テトロドトキシンをもっているため、触れた後にうっかり目をこすったりしたら大変です。また、脊椎動物の中ではとくに再生能力が高く、切れた尾部は骨まで元に戻るほどです。名の由来は「井=水田」、井(イ)を守るからだと言われています。淀川水系の流入河川や平野部の水路で、かつては普通に見ることができましたが、今では里山を流れる川やため池でしか出会うことがありません。(画/三好智加)



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



7月に「神の木」を見た。樹液はそんなにでていないのに甲虫類が何十匹と密集し、まるで居酒屋状態。標本にする分を捕獲したが、3時間も経てば満員御礼。8月の終わり、もう一度訪ねてみた。森の中はツクツクボウシの鳴き声が響く。「ツクツクウォーッ! ウォッ!」と徐々にテンポが速くなって、神の木への期待が高まる。

だが、流行の時期は過ぎたようだ。神の木はシャッター商店街の静けさ。足元を見るとヤスデが這っていた。空中からはそろそろ繁殖期を迎えるスズメバチが威嚇。客層はすっかりと様変わり。同じ場所であっても、季節の移り変わりに伴って観察できる生物が違う。これって、多様なんだろな。(編集長・石山郁慧)